

ねん にち
2020年6月14日

せいたい
キリストの聖体

きく ち いさおだい し きょう せつきょう
菊地 功大司教 ミサ説教

とうきょうきょうく きんきゅう じたいせんげん かいじょ ご じょうきょう み まも つぎ
東京教区では、緊急事態宣言の解除後、状況を見守ってきましたが、次の
にちようび しょうきょうく かつどう だんかいてき さいかい
日曜日から、小教区における活動を段階的に再開することにしました。もち
かんせん しゅうそく しんちょう こうどう
ろん感染が終息したわけではありませんから、慎重に行動しなければなりません
ので、当初の間は、感染対策をしたり、距離を保ったり、重篤化のリス
クが高い高齢の方にはしばらくは我慢をお願いしたり、いろいろな制約の中
たか こうれい かた が まん ねが せいやく なか
での再開となります。

し じゅんせつだいいちしゅじつ はじ さんかげつはん およ なが き かん しょうきょうく かつどう
四旬節第一主日に始まって三ヶ月半に及ぶ長い期間、小教区でのミサや活動
ちゅうし れいてき かわ たが まも
を中止してきました。霊的な渴きのうちにあっても、お互いのいのちを守る
ためた しの きょうりよく みな ころろ かんしゃもう あ
ために耐え忍び、協力してくださった皆さんには、心から感謝申し上げます。

きょう なか ちりょう ぜんりよく つ いりょうかんけい
今日もまたこのミサの中で、治療のために全力を尽くしておられる医療関係
しゃ びょうしょう みな ころろ いの
者と、病床にある皆さんのために、心からお祈りいたします。

なが じしゆく きかん せいたい しゅじつ お いぎぶか
この長い自粛の期間を、キリストの聖体の主日で終わりとすることは、意義深
いことです。なんとんでもこの自粛は、共にきょうかい つど いの とき いっしょ
にできなかつたと言うだけではなく、せいたいさいぎ せいたい げんそん
聖体祭儀にあつてご聖体のうちに現存
されているしゅ いっち しんこう いちばんたいせつ ひせき
主イエスと一致するという、信仰にとって一番大切な秘跡から、わ
たとお
たしたちを遠ざけてしまいました。

きょうかいけんしょう せいたい きょうできせいかつぜんたい げんせん
教会憲章において、聖体のいけにえは「キリスト教的生活全体の源泉であり
ちやうてん かんしゃ さいぎ しゃ しんてき
頂点」であつて、感謝の祭儀にあずかることで、キリスト者は「神的いけに
かみ じぶんじしん してき
えを神にささげ、そのいけにえとともに自分自身もささげる」と指摘されてい
ます(11)。

また^{きょうこう} 教皇ヨハネ・パウロ二世は、「^{に せい} 教会にいのちを^{きょうかい} 与える^{あた} 聖体^{せいたい}」において、
ご^{せいたい} 聖体^{じゅうようせい} の^の 重要性^の をこう^の 述べて^の います。

「^{きょうかい} 教会は^{すぎこし} 過越^{しん び} の^う 神秘^う から^う 生まれ^う ました。まさに^{すぎこし} それゆえに、^{しん び} 過越^め の^め 神秘^め を目^め に見える^め かたち^め で^め 表す^め 秘跡^め としての^め 聖体^め は、^め 教会生活^め の^め 中心^め に^め 位置^め づけ^め られ^め ます。^め (3)」

実際に^{じっさい} ミサ^じ にあ^じ ずか^じ る^じ ことが^じ でき^じ ず、^{きょうかいきょうどうたい} 教会^い 共同^い 体^い にと^い っ^い て^い 一^い 番^い 大^い 切^い な^い この^い 聖^い 体^い の^い 秘^い 跡^い に^い 共^い に^い あ^い ずか^い る^い ことが^い でき^い な^い かつ^い た^い こと^い は、^{きょうかい} 教会^お にと^お っ^お て^お 大^お きな^お 苦^お し^お み^お であり、^お 悲^お し^お み^お であり^お ました。

お^{ひとり} 一人^{ひとり} お^{ひとり} 一人^{ひとり} の^{ひとり} 靈^{ひとり} 的^{ひとり} な^{ひとり} 渴^{ひとり} き^{ひとり} を^{ひとり} 癒^{ひとり} や^{ひとり} す^{ひとり} と^{ひとり} い^{ひとり} う、^{ひとり} 個^{ひとり} 人^{ひとり} の^{ひとり} 信^{ひとり} 仰^{ひとり} の^{ひとり} 充^{ひとり} 足^{ひとり} と^{ひとり} い^{ひとり} う^{ひとり} 側^{ひとり} 面^{ひとり} も^{ひとり} も^{ひとり} ち^{ひとり} ろ^{ひとり} ん^{ひとり} 大^{ひとり} 事^{ひとり} ですが、^{ひとり} それ^{ひとり} 以^{ひとり} 上^{ひとり} に、^{ひとり} ご^{ひとり} 聖^{ひとり} 体^{ひとり} は^{ひとり} 共^{ひとり} 同^{ひとり} 体^{ひとり} の^{ひとり} 秘^{ひとり} 跡^{ひとり} です。^{ひとり} そ^{ひとり} も^{ひとり} そ^{ひとり} も^{ひとり} ミ^{ひとり} サ^{ひとり} それ^{ひとり} 自^{ひとり} 体^{ひとり} が、^{ひとり} 共^{ひとり} 同^{ひとり} 体^{ひとり} の^{ひとり} 祭^{ひとり} 儀^{ひとり} です。^{ひとり} 聖^{ひとり} 体^{ひとり} は^{ひとり} 一^{ひとり} 人^{ひとり} で^{ひとり} 受^{ひとり} け^{ひとり} た^{ひとり} と^{ひとり} し^{ひとり} て^{ひとり} も、^{ひとり} 靈^{ひとり} 的^{ひとり} 聖^{ひとり} 体^{ひとり} は^{ひとり} 一^{ひとり} 人^{ひとり} で^{ひとり} し^{ひとり} た^{ひとり} と^{ひとり} し^{ひとり} て^{ひとり} も、^{ひとり} 共^{ひとり} 同^{ひとり} 体^{ひとり} の^{ひとり} 交^{ひとり} わ^{ひとり} り^{ひとり} の^{ひとり} うち^{ひとり} に^{ひとり} わ^{ひとり} た^{ひとり} し^{ひとり} た^{ひとり} ち^{ひとり} は^{ひとり} ご^{ひとり} 聖^{ひとり} 体^{ひとり} を^{ひとり} い^{ひとり} た^{ひとり} だ^{ひとり} き^{ひとり} ます。

それは^{し さい} 司^し 祭^{さい} が^し 一^し 人^し で^し ミ^し サ^し を^し 捧^し げ^し て^し も、^し 個^し 人^し の^し 信^し 心^し の^し た^し め^し で^し は^し な^し く、^し 共^し 同^し 体^し の^し 交^し わ^し り^し の^し うち^し に^し ミ^し サ^し を^し 捧^し げ^し る^し の^し と^し 同^し じ^し で^し あ^し り^し ます。

「^{きょうかい} 教会^{あた} に^{せいたい} い^{つぎ} の^{しる} ち^{しる} を^{しる} 与^{しる} える^{しる} 聖^{しる} 体^{しる}」^{しる} には、^{しる} 次^{しる} の^{しる} よ^{しる} う^{しる} に^{しる} 記^{しる} さ^{しる} れ^{しる} て^{しる} います。

「^{し さい} (司^し 祭^{さい} が^し 祭^し 儀^し を^し 行^し う^し こと)^し それ^し は^し 司^し 祭^し の^し 靈^し 的^し 生^し 活^し の^し た^し め^し だ^し け^し で^し な^し く、^し 教^し 会^し と^し 世^し 界^し の^し 善^し の^し た^し め^し に^し も^し な^し り^し ます。^し な^し ぜ^し な^し ら^し 『^し た^し と^し え^し 信^し 者^し が^し 列^し 席^し で^し き^し な^し く^し て^し も、^し 感^し 謝^し の^し 祭^し 儀^し は^し キ^し リ^し ス^し ト^し の^し 行^し 為^し で^し あ^し り、^し 教^し 会^し の^し 行^し 為^し だ^し か^し ら^し です』^し (31)

パウロは^{きょうかい} コ^{て がみ} リ^さ ント^さ の^さ 教^さ 会^さ へ^さ の^さ 手^さ 紙^さ で、「^さ わ^さ た^さ し^さ た^さ ち^さ が^さ 裂^さ く^さ パ^さ ン^さ は、^さ キ^さ リ^さ ス^さ ト^さ の^さ 体^さ に^さ あ^さ ず^さ か^さ る^さ こと^さ で^さ は^さ な^さ い^さ か。^さ パ^さ ン^さ は^さ 一^さ つ^さ だ^さ か^さ ら、^さ わ^さ た^さ し^さ た^さ ち^さ は^さ 大^さ 勢^さ で^さ も^さ ひ

とつの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです」と述べて、聖体祭儀が共同体の秘跡であることを強調されます。

「聖体は交わりを造り出し、交わりを育みます」と指摘する教皇ヨハネ・パウロ二世は、聖アウグスチヌスの言葉を引いて、「主なるキリストは・・・ご自分の食卓にわたしたちの平和と一致の神秘をささげます。一致のきずなを保つことなしにこの一致の神秘を受ける者は、神秘を自分の救いのために受けることができません」(40)とまで指摘しています。

わたしたちの信仰は、共同体の信仰です。わたしたちの信仰は、「交わり」のうちにある信仰です。「交わり」とは、「共有する」ことだったり、「分かち合う」ことだったり、「あずかる」ことを意味しています。パウロのコリントの教会への手紙に、「わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか」と記されていました。その「あずかる」が、すなわち「交わり」のことです。わたしたちの信仰は、キリストの体である共同体を通じて、キリストの体にあずかり、いのちを分かち合い、愛を共有する交わりのなかで、生きている信仰です。

これから段階的に公開ミサが再開されて、制約があるとはいえ、ご聖体をおいただく機会があることでしょう。三ヶ月間、あずかれない状態が強制されていたのですから、そのときの喜びには大きいものがあることだと思えます。でもその霊的渇きの期間を過ごしたわたしたちは、ご聖体を受ける意味をあらためて理解してから、拝領したいと思えます。自分がキリストと信仰において一致するという個人的な喜びと同時に、拝領は共同体の交わりのうちに、兄弟姉妹と共に一つの体にあずかるのであり、だからこそ、一緒にあずかることのできない方々へ思いを馳せ、様々な思いを心に抱いている兄弟姉妹に思いを馳せ、配慮と心配りの時としていただきたいのです。

同時に、わたしたちはご聖体をいただくことで、「世の終わりまで、あなた方と共にいる」といわれた主イエスの約束を思い起こします。共にいてくださる主イエスは、その福音を世の終わりまで、世界の果てまで告げ知らせよと命じられた主です。ですから、ご聖体の秘跡にあずかるわたしたちは、福音を告げしらせないわけには行きません。

「教会にいのちを与える聖体」で、教皇ヨハネ・パウロ二世はこう記します。「キリストとのこの一致によって、新しい契約の民は、自分たちだけで固まるのではなくて、人類一致のための「秘跡」となります。すなわち、すべての人のあがないのために、キリストによってもたらされる救いのしるしと道具、世の光、地の塩となるのです。教会の使命とキリストの使命は連続しています。・・・感謝の祭儀はあらゆる福音宣教の源泉であると同時に頂点でもあるのです。」(22)

申命記に、「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」と記されていました。

ご聖体を受けるわたしたちは、人となられた神のみ言葉をわたしたちのうちにいただくのですから、聖書に記された神の言葉に耳を傾け、それを通じて、イエスと日々出会うことも欠かせません。

公開ミサがなかったことで、ご聖体を実際にいただくことに思いが集中しますが、ミサを形作っている言葉の祭儀において、まず神のみ言葉に耳を傾けることも、忘れてはなりません。

共同体の交わりと一致のなかで、ご聖体と御言葉のうちに現存される主イエスと出会い、心のうちに一致し、愛の分かち合いから力をいただき、宣教

への熱意を受け、聖霊に導かれながら、社会のただ中であって、福音をあかしし、告げてまいりましょう。